

旭日、遥かなり 1

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地図・図版 安達裕章
編集協力 らいとすたつふ

目次

序章

9

第一章 運命の投弾

19

第二章 怒れる星条旗^い

33

第三章 山本五十六の選択

79

第四章 盟約の死角

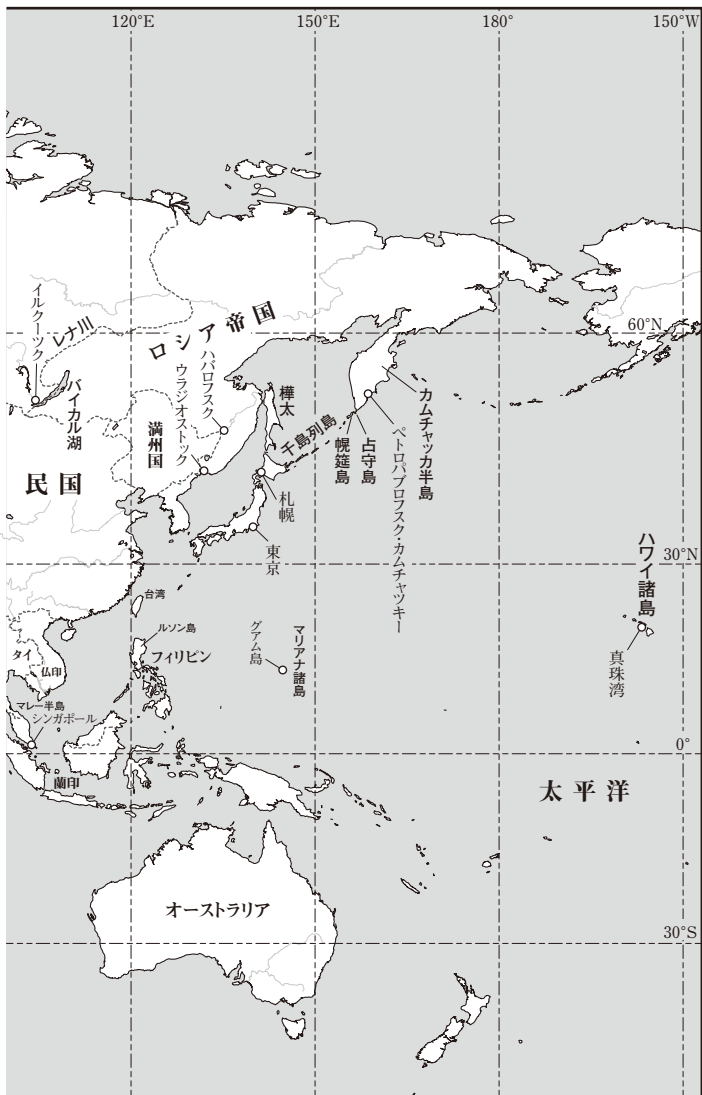
121

第五章 「リパルス」咆哮^{ほうこう}

139

第六章 要衝の島

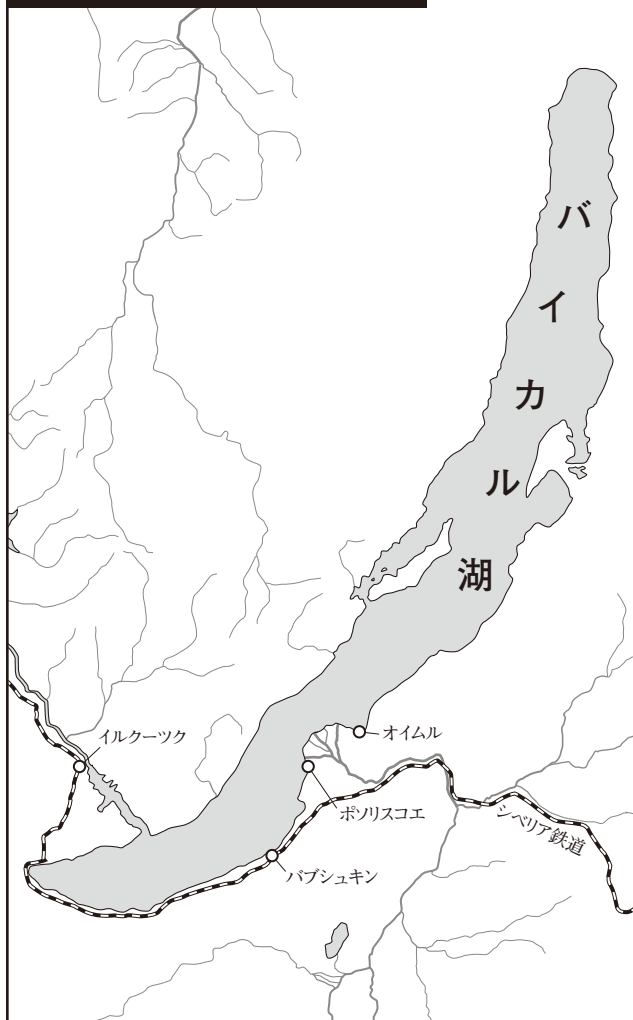
229



ユーラシア大陸要図



バイカル湖要図



旭日、遥かなり 1



序 章

海軍中佐淵田美津雄は、息を呑んだ。

前方上空を、多数の機影が塞いでいる。

既にこちらを発見しているのだろう、急速に距離を詰めて来る。

液冷エンジン機らしからぬ太い機首と低翼配置の主翼。

カーチスP 40 ッウォーホーク。米陸軍航空隊の主力戦闘機だ。

機数は、ざっと一〇〇機。

攻撃隊の総数には及ばないが、制空隊の零式艦上

戦闘機よりずっと多い。

(奇襲は失敗。強襲だ)

淵田は、即座に判断した。

指揮官機の偵察員席から機外に信号拳銃を突き出し、引き金を二度引いた。

空中に、二条の白煙が漂った。

真珠湾第一次攻撃隊の一八九機全機に、「強襲」の合図を送ったのだ。

制空隊の零戦四五機が上昇に転じ、P 40に立ち向かう。

続いて、第五航空戦隊の艦爆隊が動く。

胴体下に二五〇キロ爆弾を懸吊した九九式艦上爆撃機五四機が速力を上げ、敵飛行場へと突進する。

敵機の約半数が零戦の牽制にかかり、残る半数は艦爆隊に鋒先を向けた。

P 40が機体を翻す度、下腹が陽光を反射し、銀色に輝く。特徴的な太い機首を真下に向け、逆落と

しに突っ込み、両翼に発射炎を閃かせる。

艦爆一機がエンジン付近に被弾したのだろう、白煙を引きながら高度を落とす。

続いて二機目が鈍い爆発音を発して火を噴き、胴体下に二五番を上げたまま、真つ逆さまに墜落する。

右主翼の中央に被弾した艦爆は、主翼の半分をもぎ取られ、錐揉み状になって墜落する。胴体に被弾

した艦爆は、昇降舵や方向舵を操る導索を切断されたのか、大きくよろめいて落伍する。

帝国海軍の空母の中で、最も新しい「翔鶴」と「瑞鶴」に配属され、勇躍出撃した艦爆乗りたちは、敵飛行場に取り付くこともかなわず、片っ端から葬り去られて行く。

淵田が率いる水平爆撃隊と、村田重治少佐が率いる雷撃隊——九七式艦上攻撃機の編隊にも、P 40が向かって来る。

九七艦攻は機首の固定機銃を持たないため、前方からの攻撃には無力だ。機体を左右に振って、回避を試みる以外にない。

だが水平爆撃隊は、胴体下に長門型戦艦の主砲弾を改造した徹甲爆弾を搭載し、雷撃隊は九一式航空魚雷を抱いている。

どちらも重量八〇〇キロに達する代物だ。機体の動きは、非常に鈍い。

P 40が急速に距離を詰め、両翼の前縁が赤い発射

炎に染まる。

一連射を浴びた九七艦攻が火を噴いてよろめき、急速に高度を下げる。

二機目、三機目と、被弾機が続出し、水平爆撃隊、雷撃隊は、編隊を大きく切り崩されて行く。

乱戦の巷から抜け出した零戦が、P 40の横合いから仕掛ける。

二〇ミリ弾発射の閃光が両翼にほとぼしり、敵機の機首や胴体に、太い火箭が突き刺さる。

P 40二機が急降下の姿勢を保ったまま墜落し、一機はよろめきながら高度を落とす。

だが、敵機の数が多い。零戦の奮闘も、艦攻隊への攻撃を食い止めることはできない。

P 40が猛速で突っ込み、一連射を浴びせるたび、空中に火焰が躍り、ジュラルミンの破片が飛び散る。

米太平洋艦隊の主力艦を叩くはずだった水平爆撃隊、雷撃隊は、真珠湾の手前で次々と火を噴き、オアフ島の大地に落下してゆく。

——数時間後、オアフ島の北二三〇哩の海面で、
 彼らの母艦も災厄に見舞われた。

第一航空艦隊旗艦「赤城」は、飛行甲板三箇所を
 抉られ、艦橋を爆砕された。

司令長官南雲忠一中将をはじめとする幕僚たち
 の運命は、艦橋の惨状を見れば一目瞭然だ。

「赤城」と共に、第一航空艦隊を編成する「加賀」
 の艦上では、「赤城」以上の惨状が展開されている。

格納甲板で起こった大規模な火災は、基準排水量
 三万八二〇〇トンの巨体を内側から焼き、噴出する
 黒煙は、艦首から艦尾までを包み込む。

火災は機関部にまで及び、行き足は完全に止まっ
 た状態だ。

第二航空戦隊旗艦「蒼龍」と僚艦「飛龍」、第五
 航空戦隊旗艦「瑞鶴」も、飛行甲板に巨大な破孔を
 穿たれ、炎上している。

「蒼龍」は、直撃弾によって艦橋の高さが半分に減
 じている。飛行甲板は、ことごとく引き剥がされた

ような有様となり、格納甲板では炎がのたうってい
 る。

「飛龍」は格納甲板で起きた爆発により、昇降機
 三基のうち二基が跳ね上がり、艦の中央に新たな構
 造物が出現したようだ。

「瑞鶴」は艦内で誘爆が起きているのか、炸裂音が
 繰り返し響いている。

爆発音が起こるたび、基準排水量二万五六七五ト
 ンの巨体は身を震わせ、無数の火の粉が飛び散る。

艦は、内側から破壊されつつあるのだ。

被弾した空母のうち、この艦が最も早く沈むのは、
 もはや既定の事実であるように思われた。

第一航空艦隊の完敗だ。

開戦劈頭、真珠湾に在泊する米太平洋艦隊の主力
 を航空攻撃で叩き、一挙に覆滅せんとする乾坤一擲
 の作戦は、見るも無惨な失敗に終わり、帝国海軍は
 開戦初日にして、虎の子とも呼ぶべき主力空母六隻
 のうち五隻を、艦隊司令部、及び各航空戦隊の司令

部ともども失うこととなつたのだ。

「……もういい」

連合艦隊司令長官山本五十六大将の重苦しい声が、部屋の中に響いた。

東京・目黒の海軍大学校内に設けられた図上演習室だ。室内には、山本が招集した各部隊の指揮官と参謀を合わせて、三〇名余りが参集している。

真珠湾攻撃の図上演習が、一旦中断された。

机上に広げられている地図には、第一航空艦隊の各艦や、真珠湾に在泊する米軍艦船を示す駒が置かれている。

一航艦からは、既に空母五隻の駒が取り除かれ、被害状況が示されていた。

「本当に、ここまでの大敗を喫することになるので、しょうか？ オアフ島が敵の本拠地だからといって、被害の見積もりが過大という気がしますが」

「結果は結果だ。直視せざるを得まい」

首を捻りながら言つた戦務参謀渡辺安次中佐に、図演の統監を務めた参謀長宇垣纏少将が、切り口上で言つた。

堅物で知られるだけに、一切の妥協を感じさせなかつた。

「しかし、我が軍の接近をこれほど容易く察知されるとは……」

信じ難い、と言いたげな表情で、図演の結果を見つめているのは、航海参謀の永田茂中佐だ。

真珠湾攻撃は、完全な奇襲が前提だった。

米軍に発見されることなく、ハワイ・オアフ島に接近するため、第一航空艦隊には、無線封止の徹底、艦船の通行量が少ない北回り航路の進撃、廃棄物の投棄厳禁等が命じられている。

それほどの注意を払つても、一航艦の行動は秘匿できないのか、と考えている様子だった。

「ハワイまでの航程が、問題なのではありません」

たった今、第一航空艦隊を叩きのめした男が、ゆつくりとした口調で発言した。

連合艦隊首席参謀藤泰造大佐。

この日の図演では赤軍、すなわち米側の指揮を担当している。

一ヶ月前、前任者の黒島亀人大佐が不慮の事故によつて死亡したため、藤は後任の首席参謀として、連合艦隊司令部に着任した。

海軍兵学校の卒業年次は四六期。黒島の二期後輩に当たる。

三号生徒のときは、一号生徒だった黒島から、さんざん鉄拳制裁を貰った仲だ。

卒業時の席次は、恩賜の短剣組にこそ入らなかつたものの、上位に入る成績であり、少尉任官後は砲術を専攻するよう上官から勧められた。

砲術は海軍でも主流派で、江田島卒業生の多くが希望するエリート・コースだ。

海軍大臣、軍令部総長、連合艦隊司令長官の海軍

三頭職は言うに及ばず、艦隊の司令長官にも、海軍省や軍令部の部課長にも、砲術の出身者は多い。将来の栄達を望むなら、上官の勧めに従うのが最善であつたろう。

だが、藤は「思うところあつて」非主流派とされる航空を専門に選んだ。

航空機が海軍の新しい主力として認識されつつある今日と異なり、航空機の性能はまだ低く、補助戦力としか見なされていなかった頃だ。

今から見れば、先見の明があつたと言えるが、当時は「変人」と見なされたものだ。

その藤が、黒島の後任として連合艦隊司令部に送り込まれたのは、山本が人事局に「黒島の後任には、航空の専門家を」と希望したこと、藤が米国留学の経験を持ち、「敵を知っている」と見なされたことの二つが理由だった。

藤は言葉が続けた。

「問題は、オアフ島に設置されている電探（電波探

信儀しんぎ）にあります。ホノルルの領事館から届けられた情報によれば、電探用の空中線は、オアフ島の四箇所ないし五箇所に死角しかくがないよう配置され、一日二四時間、切れ間なく周囲を見張っております。探知距離は、最低でも一〇〇哩に達するとの情報も、合わせて届けられています。我が軍の攻撃隊が接近した場合、敵に察知されて大規模な迎撃を受ける可能性は、九割五分以上と見積もられます」

「奇襲は不可能、と言うのかね？」

山本が、ざらついたような声で聞いた。

図演の結果と藤の言葉の両方に、相当な不快感を覚おぼえていることが、表情と声からうかがえた。

「日米が開戦に至った場合、開戦と同時に真珠湾を奇襲し、米太平洋艦隊を一気に覆滅する」

との作戦案は、山本の強い希望によって計画され、黒島が中心となって、推進されて来たものだ。

藤が連合艦隊司令部に着任したとき、最初に命じられた仕事は、黒島の後を引き継いで、真珠湾攻撃

の作戦計画を完成させることだった。

その藤が、真珠湾攻撃に成算せいさんなしとの結論を出したのだ。

山本にしてみれば、裏切りにあったような心境なのかもしれない。

「残念ではありますが、その可能性は高いと判断せざるを得ません。攻撃隊がオアフ島の一〇〇哩手前で発見されたとして、オアフ島上空に到達するまでには、三〇分余りを要します。ハワイの米軍が、戦闘機を出撃させるには充分な時間です。一航艦が速やかにオアフ島近海から離脱すれば、艦艇の喪失そうしつは抑えられるかもしれませんが、敵戦闘機の迎撃による艦上機の大量喪失は避けられないでしょう」

「黒島前首席参謀は、成否は五分五分ごぶごぶと考えておられたようですが……」

どこかためらいがちな口調で言った作戦参謀三和義勇中佐むたけに、藤は答えた。

「前首席参謀が計画を作成しておられたときは、ま

だオアフ島に配置されている電探の情報が届いていませんでした。ですが、電探による濃密な探知網が敷かれていとなれば、条件は根本的に変わってきます。作戦とは、最新の情報に基づいて立てられねばなりません」

真珠湾における米太平洋艦隊の動向については、ホノルルの総領事館に勤務する海軍の諜報員から、定期的に情報が送られて来る。

対米情報を担当する軍令部第五課の嘱託が、身分を隠し、外務書記生という資格で同地に駐在して、米軍の動きを探っているのだ。

諜報員がもたらす情報は、真珠湾における在泊艦船、オアフ島の各飛行場に展開する米軍の航空機、米海軍将兵の士気や錬度、対日開戦に関する噂等多岐に亘った。

この情報により、連合艦隊司令部は、戦艦、空母といった米太平洋艦隊の主力艦艇は、ほぼ全艦が真珠湾に在泊していること、オアフ島における米軍の

航空兵力は約四〇〇機と見積もられることを把握した。

前者の情報は、殊更山本や黒島を喜ばせた。

開戦と同時にそれらを壊滅させてしまえば、米国には対日戦のための手駒がなくなり、日本との講和を選択せざるを得ないからだ。

だが去る九月八日、新たに届いた「オアフ島二電探有り」との情報が、連合艦隊司令部に冷水を浴びせた。

藤はこの情報を重大視し、九月一六日に予定されていた真珠湾攻撃の図上演習計画を修正するよう、山本と宇垣に申し入れた。

「図演は、電探の存在を前提として実施すべきです」

と、強く主張したのだ。

図演では、米側は軍令部第二部員の小川貫璽大佐が担当することになっていたが、藤は自身が赤軍を引き受けたいと希望した。

青軍、すなわち日本側の担当は、司令長官南雲忠一中将以下の第一航空艦隊司令部幕僚と麾下の各戦隊司令官だ。

藤はたった一人で、一航艦と戦ったのだ。

藤は、仮想上の電探を駆使して、六隻の空母から出撃した攻撃隊を捕捉し、全戦闘機を出撃させて、徹底的に叩きのめした。

返す刀で一航艦を襲い、「翔鶴」以外の全空母を撃沈して、真珠湾攻撃が開戦劈頭の大敗を招くことを証明したのだった。

「その電探ですが、本当に一〇〇哩もの探知距離を持つのでしょうか？ ホノルルの諜報員が虚偽を報告していると言いませんが、性能を過大に見積もっている可能性はないでしょうか？」

一航艦首席参謀の大石保中佐の疑問に、連合艦隊通信参謀和田雄四郎中佐が答えた。

「地上に据え付けられる大型の電探であれば、それだけの性能を持つことはあります。一〇〇哩とい

うのは、むしろ性能を低めに見積もっている可能性すら考えられます」

「しかし、我が軍でもまだ実用段階に至っていない電探を、米軍が……」

「米国なら、あり得るでしょう」

第二航空戦隊司令官の山口多聞少将が、言下に答えた。

連合艦隊参謀長の宇垣とは江田島の同期であり、卒業時の席次は二位という秀才だ。

大尉時代にプリンストン大学留学、大佐時代に駐米大使館付海軍武官と、二度に亘る米国生活を経験している。

今、凶演に参加している人々の中では、最も米国をよく知る人物と言える。

その山口の言葉だけに、誰もが耳を傾けた。

「かの国の科学技術は、多くの面で我が国を凌駕しています。特に通信、電探等、電波の利用技術については、一日どころか、一〇日ぐらいの長がある

と言つても過言ではありません。オアフ島に高性能な電探が設置されているという情報は、事実と考えるべきでしょう」

「真珠湾に対する奇襲は成立しない。それが結論なのだな？」

確認を求める口調で聞いた山本に、宇垣が答えた。

「図演の結果からは、そのように判断せざるを得ません。強襲であれば可能かもしれませんが、相当な被害が生じることは目に見えています」

「そうか……」

山本は、肩を落とした。

「開戦劈頭の一撃で、太平洋艦隊を壊滅させる。米国相手の戦争では、この作戦以外に我が方の勝機はない。真珠湾攻撃は、私の信念である」

何ヶ月も前からこのように公言し、軍令部からの批判も多かった真珠湾攻撃の準備を強引に推進したのは、他ならぬ山本だ。

それだけに、図演の結果は不本意であり、衝撃を

隠し切れないのだろう。

「真珠湾攻撃が不可であれば、対米作戦は、既定の漸減邀撃作戦に立ち返る以外にない」と――

「待ってくれ」

言いかけた宇垣の言葉を、山本が右手を挙げて遮った。

「事は極めて重大だ。少し、考える時間が欲しい。この問題は、私に預けて貰いたい」

第一章 運命の投弾

1

海軍大学校での図演より、およそ一ヶ月半前——昭和一六年八月一日、第二航空戦隊の「蒼龍」「飛龍」は、北の海にいた。

カムチャツカ半島南東部に位置する港町ペトロパブロフスク・カムチャツキーの東南東六〇哩だ。

前方には、第五艦隊の軽巡洋艦「多摩」「木曾」と特設水上機母艦「君川丸」、第二三駆逐隊の「菊月」「三日月」「望月」「夕月」が布陣している。

日本最北端の千島列島占守島よりも北に位置しているため、気温は低い。

気象班からは、「艦外温度は一度」との報告が届いている。

司令官山口多聞少将を初めとする二航戦の幕僚も、各艦の乗員も、八月であるにも関わらず、全員が第一種軍装の上から防寒着を着込んでいる。

二隻の空母の甲板上には、艦上機の半数に当たる二七機ずつが敷き並べられ、暖機運転の音が、北海の冷気をかき乱していた。

「索敵機より受信!」

午前八時二三分、旗艦「蒼龍」の艦橋に、通信室からの報告が上げられた。

「君川丸」から発進した九四式水上偵察機が、報告電を送って来たのだ。

「港内ノ在泊艦船、駆逐艦四、水雷艇六、艦型不詳ノ小型艦六、輸送船四。敵戦闘機ノ迎撃ナシ。対空砲火ナシ。〇七五八」

「蒼龍」の通信長佐藤則夫少佐が報告電を読み上げると、首席参謀大橋恭三中佐が山口に言った。

「対空砲火の反撃がないということは、駆逐艦以下の艦艇は、まだ反乱軍の手に落ちていないということでしょうか?」

「それはあるまい。各艦が反乱軍の手に落ちていないのであれば、既に脱出しているはずだ。各艦は反

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。